斎藤博美の へこまない介護

円柱ポストに投函、達成感

「昭和」の小道具

民家の庭先にぽつんとたたずむ赤い円柱型の郵便ポスト。

「ここはどんな状態の手紙でも受け付けます」。社会福祉士の川内潤さん(29)は言う。

川崎市麻生区にある「桃の木停かたひら」は、地域密着型の認知症専用デイサービス。空き家だった2階建ての民家を借り上げ、今月開設したばかりだ。昭和の歌謡曲が流れるカラオケ、金盥(かなだらい)に洗濯板、ダイヤル式の黒電話……。どれも川内さんが集めた。

なかでもポストはどうしてもほしかった。この施設の管理者になることが決まってから半年、インターネットのオークションや地域の郵便局などに出向いて探した。ようやく逗子海岸で夏の間しか使っていないポストがあることを知り、使わない季節だけ貸してもらった。

なぜポスト？　「認知症の人にとって、一つの作業を完結することが大事なんです」。利用者が大事な人に手紙を書く。庭を5㍍ほど歩いて投函(ゆかん)することで、達成感を味わえる。ちょっと昔の円柱型であることが利用者の心を引き立てる。

全国の有料老人ホームなどを1千カ所以上訪ねた川内さんは、ポストが認知症に限らず利用者に良い刺激を与えている施設を見た。元気が出る象徴に思え、自分が管理者になったら絶対設置しようと決めていた。

ポストや洗濯板。昭和30年代から40年代をイメージして川内さんが集めた＝川崎市麻生区

平塚市の出身。大学で介護保険制度を学ぶ。在学中から有料老人ホームを紹介するサイトの立ち上げを手伝い、そのまま就職。その後独立して老人ホームの紹介ビジネスなどを始める。高齢者施設に詳しく、若き論客でもある。一方で、市民グループ「となりのかいご」の代表として、介護家族の抱える問題にも取り組む。

今年3月、特別養護老人ホームなどを運営する「金井原苑」に入り広報などを担当、「桃の木停かたひら」の開設で施設管理者を任された。

「これまでの知識や経験を生かしたい」。ポストも黒電話もカラオケも利用者がいきいき使っている施設が参考になった。利用者が元気になれば、家族の負担も軽減できると考える。

定員は12人。今のところ3人が利用する予定だ。ねじ式の柱時計、四つ足のテレビ、絞り機のついた洗濯機、蓄音機……。昔の道具を求め、利用者がなじみのある空間を徐々に作っていきたい。

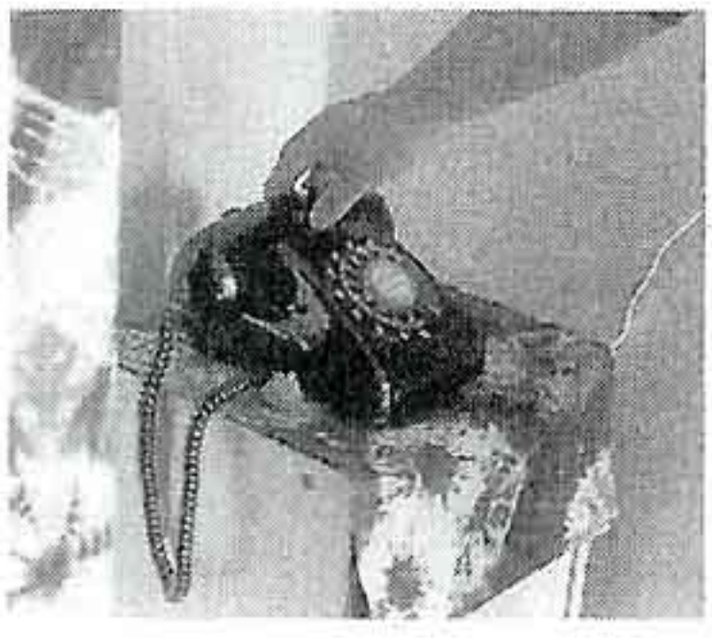
「まずは来夏までに常設できるポストを探さないと」。夢の実現へ歩みを進める。

◇

父の七回忌で母を連れて石川県の能登の寺に行き、ついでに白山市鶴来に30分だけ立ち寄り、母の両親の墓参りをした。

どしゃぶりで母は体調不良なのに「めったに来られない」と強行。でも街に入ると母は元気になっていった。花屋で知り合いの消息を聞き、街中に残る小学校校舎の一部を見て、出発前日まで点滴を打っていたのがうそのように顔色も良くなった。

母にとって元気がでる「赤いポスト」はふるさとの街並みだった。



知り合いに譲ってもらった黒電話。20代の川内さんの実家では使っていなかった